シスモンディにおける蓄積論の旋回*

吉原泰助

I はじめに

「A】本稿の課題

周知のごとく, 木綿工業主導のイギリス産業 革命の成熟とイギリス中心の世界市場の形成と いう二様の構成のもとに、イギリスにおける産 業資本がその固有の再生産軌道に定置されんと しつつあった 19世紀 10年代後半,シスモンデ (Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842) は、「過渡的恐慌」¹⁾と労働者 階級の「過酷な窮乏」とを目の当たりにして2)、 世紀明けにあれほどまでに絶賛し信奉していた スミスの体系に疑惑を抱くにいたる。その最初 の表白は, 百科辞典への寄稿論稿「経済学」 (Political Economy, Brewster's Edinburgh Encyclopædia[1815], 1818.) においてである. すなわち、シスモンディは、初めての経済学書 『商業的富について』(De la richesse commerciale, ou principes d'économie politique, appliqués à la législation du commerce, 2 vol. Paschaud, Genève, 1803.) ——以下『商業的富』 と略称 — では、第1巻、第2巻とも、その扉 に、スミス『国富論』第4編第2章からの抜粋 を英文のまま掲げ、また、序文や緒論で、スミ スに対する手放しの礼賛と彼への私淑の想を熱 っぽく語っていた3)。だが、こうしたスミス門 徒シスモンディも, 十数年後に発表された「経 済学」では、「大工業の疾風怒涛の時代」がにお ける資本主義的諸矛盾の顕在化をまえに, 信条 のゆらぎを告白するのである。彼は、この新著

において、いぜんスミスの「原理」の卓絶性および有効性を説きながらも、賛辞に終始していた前著の叙述に見合った文脈のなかに、「たしかに、体験した事実は、われわれに新しい真理を開示した。とりわけ、ここ数年の体験は、われわれに悲しむべき発見をなすことを強いた。しかし、云々」50という一文を挿入せざるをえなかったのである。

本稿の課題は、このシスモンディにおける「旧原理」から「新原理」への旋回――「新しい真理」の受容――の初動を、その軸点たる蓄積論に照準をあてて論じようとすることにおかれる。

もちろん, いやしくもシスモンディの経済学 を扱った研究は,主著『経済学新原理』 (Nouveaux principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec la population, 2 vol. Delaunay, Paris, 1819, 2e éd. augumentée, 2 vol. 1827.) ——以下『新原理』 と略称--生成過程での、上記の旋回に例外な く言及している。それどころか、わが国の研究 史にも, このテーマを真正面から主題とする論 稿を見出しうるほどである。にもかかわらず、 ここで同一テーマを取り上げる所以は他でもな い、従来の研究では、この間における理論的転 成の考察は、おしなべて『新原理』第1、第2版 の序文における本人の告白のパラフレーズにと どまるきらいがあり、『商業的富』や「経済学」 の中身にまで立ち入っての論究は, むしろ皆無 に等しかったからである.

本稿で、われわれは、まず「旧原理」=『商業的富』を取り上げて、シスモンディにおける初期の正統派的蓄積論の理論的輪郭をなぞり、ついで、その執筆を転機として、オプティミステ

^{*} 本稿のテーマにかんしては、一橋大学経済研究所での研究会において、所員の諸氏から多くの御教示を得た。また、信州大学繊維学部の篠原昭教授には、製糸技術等にかんしてお教えをこうた。ともに記して感謝の意を表したい。

ィックな正統派的蓄積論からの――『新原理』の場合に較べればなお控えめながら――離脱が始動する「経済学」との対比をおこない、もって、両者の異同のうちに、『新原理』に先立つ段階でのシスモンディ蓄積論旋回の航跡を辿ろうと試みる。もし、これらの検討をつうじて、旋回の軌跡を破線から実線に換ええたとすれば、本稿も、研究史に幾許かの寄与をなしえたこととなるであろう。

[B] 『商業的富』と「経済学」

そもそも、『商業的富』は、経済学史研究の上で、また、シスモンディ経済学研究の上でも、顧みられることの稀な文献であったっ、そうした状況は、シスモンディをシスモンディたらしめる独自性はあげて『新原理』に、ないしそれ以降に求められるという、一般的な評価のしからしむるところでもあったろうし、加うるに、研究史のとばぐちでアフタリオンが『商業的富』に与えた低い位置づけも、あずかっていたかもしれない8.

シスモンディの第二の故郷ペシャ(Pescia)の 図書館に所蔵されている「シスモンディ文書」 を精査された吉田静一氏によれば, 本書の現行 メイン・タイトル—De la richesse commerciale——は、最終上梓段階で採用されたものの ようで、草稿には、刊行本に見られる副題― Principes d'économie politique, appliqués à la législation du commerce あるいは若干異同の ある L'économie politique considérée dans ses rapports avec la législation commerciale が表 題として付けられていたというの。これら『商 業的富』の草稿の表題、ないし現行のサブタイ トルは、この著作の狙いが、宗師アダム・スミ スの樹立した「経済学原理」をナポレオン体制 下フランスの「商業法制」の現況に適用するこ とにある旨を表わしている。

そして、著者は、この課題を果たすために、それぞれ九つの章で編まれた3編——第1編「資本について」、第2編「価格について」,第3編「独占について」——からなる2巻本を執筆・上梓したのである。著作全体は、シスモンディの説明では、第1巻に収められた第1編お

よび第2編の最初の3章と、第2巻に廻された第2編の第4章以降との2大部分に大別できる。そして、先の表現を踏襲すれば、前半部の第1巻で「経済学原理」が説かれ、後半部の第2巻では、そのフランス「商業法制」への適用が扱われるという編成となっている100。また、第1巻末尾に「この著述で使われた学術用語の定義」と題した数ページの後記が付け加えられているのだが、その役割も、「理論的部分の最後に、そこで使われている基本用語の全定義を総括すること」と規定され、しかも、これらの定義のレジュメが同時に「著作全体で展開された根本的諸原理の要約を形作る」役割をももつと位置づけられているのである110。

われわれの『商業的富』の検討も、当面、もっぱら第1巻に限定されうる。その際、巻末に付された定義の集成が、著者の意図どおり利用価値の大きな参考資料となりうるであろう。

他方、十数年間離れていた経済学研究への復 帰第1作である「経済学」は、自然哲学者で編 纂者でもあったブリュースター卿 (Sir David Brewster, 1781-1868)の求めに応じて, 『エデ ィンバラ百科辞典』に寄稿した論稿である。そ の経緯はさだかではないが、寄稿は、ほどなく シスモンディの義兄となるスコットランドの評 論家・政治家マキントッシュ(Sir James Mackintosh, 1765-1832)の仲介になるものと 推定されている12) ちなみに、前掲の復刻本に は[1815]なる表示がなされている。これは執筆 年の推定と思われるが、もし、これをとっても、 それは執筆開始年であろう。「経済学」から引 用した先の一文にいう「ここ数年の体験」とい う表現は、1810-11年恐慌および1815-16年恐 慌を含む「数年」と解するのが妥当であり、ま た,「経済学」の内容も, 1815-16年恐慌の影響 が濃厚な『新原理』に準ずるものである以上, 擱筆は早くとも17年頃で、執筆1817-18年、刊 行18年という通説の方が平仄が合う。

ところで、「経済学」も、『商業的富』同様、 不運な著作であることに変わりはない。この 「経済学」は、その出版の翌年踵を接して主著 『新原理』が公刊され、内容の上でも、「経済学」 で芽生え、かつ控えめに主張された「新原理」 が、翌年の大著で敷衍され、「旧原理」との対抗 も,そこで鮮やかとなる関係にあったから、影 薄き存在となってしまった。加うるに,「経済 学」と『新原理』は、その構成まで瓜二つであ った。「経済学」は、第1章「この学問の対象と 起源」、第2章「富の形成と増進」、第3章「土 地の富について」、第4章「商業的富につい て」、第5章「貨幣について」、第6章「租税に ついて」、第7章「人口について」という7章編 成であるが、「経済学」第1章の標題を「経済学 の目的とこの学問の起源」と手直しするだけで, 章を編に置き換えればそのまま『新原理』の編 成となる関係にある。それだけに,「経済学」 は、これまた研究史の片隅に埋没せしめられて しまったのである.

以下では、まず、II 章において、あらかじめ 『商業的富』における蓄積論の骨子を確認した 上で、III 章で、社会的生産物の価値構成把握の 変化、とりわけ余剰賃金範疇の消滅を、また IV 章で、国民所得範疇および経済バランス=循環 把握の転成を、最後に、V 章で、「経済学」にお ける相対的過剰人口論生成の問題を論ずる。

II 「旧原理」=『商業的富』における 蓄積シェーマ

さて、われわれは、『商業的富』の理論的部 分=第1巻中, 国富の起源, 固定資本, 流動資 本を説明した最初の三つの章につづく、第1編 第4章「社会の所得と支出;それらのバラン ス」(Revenus et dépenses de la société; leur balance)の中に、「旧原理」段階におけるシス モンディ蓄積論の骨格を読みとることができる。 シスモンディの場合にも, スミス同様に年生産 物価値は価値生産物に解消される。 すなわち, そこでも、生産物の価格は利潤と賃金と「ラー ント」(rente)から構成される¹³⁾。より正確にい えば、生産物の「販売者価格」は、固定資本の 「ラーント」,流動資本の利潤および賃金からな る「必要価格」(prix nécessaire)に,原料供給に 寄与する自然の所有者たる地主に支払われる 「ラーント」=地代(rente foncière)を加えた

「内在価格」(prix intrinsèque)としておさえられていた¹⁴⁾. 古典派経済学に共通するいわゆる「v+mのドグマ」,これである。ここで,スミスと必ずしも重ならないシスモンディの資本の形態規定=分類やラーントないし利潤把握の諸特徴に立ち入ることは,紙幅の都合上,不可能である。また,年生産物価値を価値生産物に解消する論理の一瞥も,つぎの章にゆだねられる。ただ,『商業的富』では,賃金は,労働者本人と家族の最低生活費に相当する「必要賃金」(salaire nécessaire)と,それを超えたゆとり部分に相当する「余剰賃金」(salaire superflu)という性格の異なる二つの部分からなるとされていた点¹⁵⁾、これに留意されたい。

また、国民所得は、ラーント、利潤および余 剰賃金から構成され、年生産物から必要賃金を 控除した額に等しい。その含意は, 国民所得は, 「国民の現在の繁栄を喪失せしめることなく消 費しうる」国富の可除部分であって, この点で 必要賃金は範疇を異にする, というにある。他 方、国民支出は、国民所得の創出に関与する3 つの「生産的階級」――産業資本家・生産的労 働者・土地所有者――の非再生産的消費支出の 総体である16)。そして、「旧原理」下でのシスモ ンディ蓄積論は、これら「国民支出と国民所得 の間の相関(proportion)」, すなわち彼のいう 「国民バランス」(balance nationale)をめぐっ て展開される。その要点を、シスモンディが彼 の理論を一般化するために註で展開しているシ ェーマに即して考察してみよう17)。ただし、対 外取引を考慮にいれたケースは, 論点が副次的 であるので、捨象する.

記号

P: 当該年度の国民労働の生産物

N:上記労働が依拠する先行の必要賃金

D: 国民支出

X:今年度新たに投下される必要賃金と, 今年度の生産のため投下された先行の必 要賃金との差額

これらの記号を用いて、シスモンディは、あらかじめ次の定義式をあたえる。

当該年度の国民所得[Rとおく]=P-N

.....(1)

今年新たに前払いされる必要賃金

$$=\overline{N+X}$$
(2)

その上で、シスモンディは、所得[R]、支出[D]、必要賃金[N]間のバランスを定式化する。彼の論理を忠実に追おう。

ここでは、対外取引を捨象しているケースの みに対象を限定しているから、生産=消費であ り、いま、消費は、 $D+\overline{N+X}$ であるので、

$$D + \overline{N + X} = P$$
 ······(3)

 $\pm t$ t, $D=P-\overline{N+X}$ (4) となるとする。この(4)式から、シスモンディ は、次の命題を導き出す。いわく、「その国民が 前進的状態にあるかそれとも後退的状態にある かは、常にXの評価に、すなわち、ある年度の 必要賃金と次年度のそれとの差額にかかってい る」18), と. ちなみに, かかる註が付された本文 の該当箇所でも,「国民的繁栄が増進するかそ れとも衰退するかについての考察のうちもっと も重要なもの, それは, 今年度前払いされる必 要賃金を前年度前払いされたそれと比較するこ とである。けだし、その差額がゼロであるか、 それともそれが正ないし負であるかによって, その国民は富裕になったり、破滅したりしうる からである」19)という。これらの命題自体は、 X>0なら拡大再生産, X<0なら縮小再生産 ----そして、X=0なら単純再生産---という 相関を述べたものである。スミスやシスモンデ ィの体系では、生産の拡大・縮小は生産的労働 者の増減に還元されるのだから, 一国の生産の 動向が、追加可変資本 [ここでは X]の正負に 依存すという結論は、しごく当たりまえのこと である。むしろ、この結論を導くのに、(4)式が 適切かどうかは、いささか首をかしげざるをえ ない. だが, (4)式を, われわれが(1)式で補完 した記号を用いてリライトすれば、

D=R+X ······(5)

となるのであって、いま(4)式を(5)式のように 読めば、この定式は、先の命題の別な表現とい える本文中の次の命題に、より良く適合するよ うに思われる。シスモンディはいう、「ある国 民の支出がその所得に等しいなら、国民の財産 は増進も衰退もせず同じ状態にどどまっているであろう。しかし、その国民の支出がその所得に等しくならなければ、それは増加するであろうし、前者が後者を上回るなら、それは浪費されるであろう。それゆえ、国民の支出とその所得との年次バランスは国民の繁栄の温度計と見なされうる \mathbf{J}^{20} 、と、ここでは、前述の X>0、X=0、X<0が、それぞれ、R>D、R=D、R<

以上が、「旧原理」=『商業的富』におけるシスモンディの蓄積シェーマである。そこに見出せるのは、まぎれもない生産資本循環基準の蓄積把握であり、ここで、シスモンディは、節約の促進[R-D の増加]による資本蓄積の推進[X の増加]を国民の繁栄に無矛盾的に結びつけ、スミスとは若干音質を変えながらも、スミスとともに「節約せよ節約せよ、蓄積せよ蓄積せよ」という同一のモチーフを謳いあげているのである²¹⁾。

III 基礎範疇=社会的総生産物の価値構成 における変成 ----余剰賃金範疇の消滅----

[A] 『商業的富』における社会的総生産物の 価値構成

シスモンディは、個別的および社会的年生産物の価値構成にかんし、『商業的富』第2編の価格論の註で、精緻に説明する。いま、これを検討しておこう。

シスモンディが例として取り上るのは、彼のホームグランドの一つ、トスカナ地方のニーヴォル渓谷(Val de Nievole)における絹製造業である²²⁾.彼は、メテイヤージュによる 336,000リーヴルの柔の栽培から 752,000リーヴルのフローレンス・タフタ(琥珀平織)の製造にいたる工程を 6 階梯に分け説明を加える。これを概括するため、若干の記号を付け加えて一般式を作成すれば、シスモンディにあっては、個別的工程における生産物の価値構成は:——

生産物価格(P)=原料(M)+必要賃金(N)

- +余剰賃金(S)+流動資本の利潤(b)
- +固定資本のラーント(f)+地代(r)

---である。いま、これを用いて、彼の「絹製 造業の生産物価格の分割」を辿ると下段のごと
 くなる。なお、下線につけた添数字は、生産物 が次の工程に入る関係を指示する.

この例から、シスモンディは、不分明な第1 生産(栽桑)と第 VI 生産(製織)をはずして,次 の結論を出す、いわく、「製織業者に絹糸を送 る前に, 生産的労働が桑の葉の価値につけくわ えた 442.632 リーヴル [(iv P+v P)-I P]は、 188.440 フランにのぼる必要賃金[II~Vの N 合計]の果実であり、それは社会に年所得とし て. ……労働によって生産された所得 254,192 リーヴル $[II \sim V \circ (S+p+f+r)$ 総和]をもた らす」(角括弧内吉原補足)、と、そして、第1 生産の必要賃金[5.000と推算]が生む所得 331.000 リーヴル[IP-IN]を加味すれば、この 年所得はさらに大きく算定できると, 付言する のである。

ここでは、ある工程の原料は前工程――それ が社会的分業として営まれようと作業場内分業 として営まれようとにかかわりなく――の生産 物である。つまり、ある工程の生産物価格のう ち原料の補塡価値 M は、前工程の生産物価格 (内訳、M+N+S+p+f+r)に還元され、こ の操作の反復によって、社会的総資本の次元で は、原料の補塡価値部分 Mは、かぎりなくゼ ロに収斂する。かくて, 第 II 章で見た価格規 定が導き出されることとなるのである。この論 理は、これほど明示的ではないにしても、「経済 学」はおろか『新原理』まで一貫している。こ うした例証は、師スミスのものよりはるかに精 緻であるが、論法そのものは、もちろん先師の

「絹製造業の生産物価格の分割」(単位=リーヴル)

(桑の葉)

(メティエ取分) (地主取分)

 $_{1]} 336,000P = 192,000[5,000N + S + p + f] + 144,000r$

「II】 養蚕(4,000 農家)

(繭)

(桑の葉) (養蚕女性労働者) (利潤)

 $_{21}400,000P = _{11}336,000M + 48,000N + 12,000S + 4,000p$

[III] 製糸

(煮繭用薪)(伐採男性労働者)(森林地主)

 $_{31}$ 28,800P = 3,840N + 2,560S + 22,400r

(生糸・副蚕糸) (繭) (薪) (繰糸女性労働者) (利潤) (煮繭釜80台ƒ) $476,560P^* = {}_{2} 400,000M + {}_{3} 28,800M + 9,600N + 2,400S + 22,040p + 13,720f$ * {41 生糸 445,710P+51 副蚕糸 30,850P

[IV·V] 撚糸

(撚糸等) (生糸)(再繰女・撚糸男女労働者*)(利潤)(撚糸機3台f)

iv) $_{61}644,580P = _{41}445,710M + 62,200N + 16,500S + 78,662p + 41,508f$

-再繰女性 36,000N+ 9,000S * 賃金内訳——撚糸男性 11,400N+ 3,800S ─ 撚糸女性 14,800N+ 3,700S

(リボン状副蚕糸)(絹紡糸) (副蚕糸)(梳紡織女性労働者) (利潤)(道具織機等 ƒ)

v) 85.710P + 48.342P = 51.30,850M + 64,800N + 16,200S + 16,777p + 5,425f

「VI] 製織

(タフタ) (撚糸)(染色工・機織工賃金, 利潤, 固定資本ラーント) 752,000P = 61644,580M + 107,420[N+S+p+f]

ものである。スミスが、穀物価格を例に、役畜等の営農用具補塡用の「第4の部分」を賃金、利潤、地代に分解することによって、年生産物価値を「v+m」に帰着させたことは、よく知られているところである²³⁾。ささいな点は別として、違いは、産業革命を挟んで、取り上げる例が、スミスの農産物からシスモンディの工業生産物に移っていること、また、解消されるべき不変資本部分が、スミスの場合は不変固定資本であったのに、シスモンディが念頭におくのは、もっぱら、素材的にも新生産物に入り込む原料、つまり不変流動資本にかぎられていたこと、これである。

[B] 「経済学」における余剰賃金範疇の消滅

シスモンディは、「経済学」のなかでも、個別資本次元での年生産物の価値構成について、①「原料」、②「労働者達の賃金」、③「固定資本の利子と利潤」、④「流動資本の利子と利潤」と、あるいは少し表現を変えて、①「原料」、②企業主「自身の賃金と労働者達の賃金の等価」、③企業主および土地所有者の「固定資本の年損耗と利子の等価」、④「流動資本の利子の等価」と、4つの部分を列記している²4)。しかし、この場合も、原料は個別資本次元でのみ価格の構成要素として認知されているのであって、それが社会的総資本次元では、前節で辿った「絹製造業の生産物価格の分割」と同様の道筋で消えてしまうのである。

問題は、ここ「経済学」では、賃金を必要賃金と余剰賃金とに分かつ・かつての見解が影をひそめ、賃金は賃金一般として扱われるようになるということである。これは、たんなる概念上の編成替えという以上の重い意味をもっている。そこで、先の「絹製造業の生産物価格の分割」に立ち返って、『商業的富』における必要賃金と余剰賃金とへの分割というシスモンディの特徴的な賃金把握を、いま少し中身に分け入って見ておく必要がある。シスモンディは、先の絹製造業の計算で、II~Vの生産に雇用される男女労働者にかんし、それぞれについて日給単価を必要賃金と余剰賃金とに截然と区分けして示し、それに作業ごとの延べ日数をかけて、各

工程の必要賃金と余剰賃金の総額をはじきだす。 それによると、日給単価の内訳は、次のごとく である。[II]養蚕労働に雇われる女性労働者 一必要賃金 40 サンチーム: 余剰賃金 10 サン チーム(以下記号表示), [III] 煮繭用薪の伐採労 働に従事する男性労働者 ---60N:40S, 繰糸 工程のために雇用される女性労働者――40N: 10S, [IV・V] (iv)再繰工程のための女性労 -40N:10S, 撚糸工程のための男性労 -60N:20S, 同女性労働者--40N: 10S, (v)副蚕糸の梳・紡・織工程に従事する 女性労働者---40N:10S と, こうである。こ れを閲すると、女性労働者の場合は、日給が50 サンチーム均一であり、必要賃金40サンチー ム, 余剰賃金10サンチームという一律の構成 をとる。これに対して、男性労働者の場合は、 日給は、職種によって、かたや1リーヴル、か たや80サンチームと開きがある。だが、その 場合にも、必要賃金は、両職種とも60サンチー ムと共通であって, 男性の職種間賃金格差は, もっぱら余剰賃金の多寡に由来していることが わかる。シスモンディによると、これらの数値 は, 日給単価にかんしては実態に即しているが, 必要賃金と余剰賃金との区分けは, 多少恣意的 であるという25)。こうした分析から、実態にお ける, 男女間賃金格差あるいは絹産業における 女性労働の有り様などをめぐって様々な思いが 浮かぶし、また、著者の思考の次元では、シス モンディが、必要賃金にかんし男女間で段差を もうけ, しかも, 性ごとには職種間賃金格差が ある場合でさえ必要賃金一律としている点など. いささか興味を引く

ところで、これら2種の賃金の定義を例の後記「学術用語の定義」から抜き出すと、必要賃金は「生産的労働者の、その生活維持に厳密に必要な動産的富の部分に相当する賃金部分」であるのに対して、余剰賃金は「彼らがその生活維持に絶対的に必要とするものを超えて、彼らの労働の代償として受け取る労働者の所得ないし流動資本の部分」と規定されている²⁶⁾、いうまでもなく、かかる賃金把握の特異性は、余剰賃金の存在にかかっている。たとえば、シスモ

ンディが節としたスミスにも、労働力需要が増 大するときには賃金が生活維持費を超えて高率 となる場合がありうるという叙述はあるが27, しかし、シスモンディのような恒常的な余剰賃 金という考え方は見あたらない。そこで、余剰 賃金にしぼって、さらにシスモンディの説明を 求めると、彼は敷衍していう、「余剰賃金は、労 働者によって奢侈と悦楽に使おうとされる;彼 は、あるときは、受け取る権利をもつ最低限の 必需品に代えるに、彼好みの気に入った食料や 衣服をもってする、あるときは、彼の所得をな すこの余剰を彼の楽しみに貢献する不生産的労 働者達の生活維持にあてる, またあるときは, この余剰は、彼の安全保持に役立つと考える別 な不生産的労働者を維持するために, 政府の租 税によって彼から徴収される |28), と。このう ち、納税部分は別として、その他は、結局、労 働者の物質的・精神的生活のゆとりと充実のた めに支出される賃金部分である。 前出の絹産業 では、労働者の賃金は、いずれも余剰賃金を含 んでおり、シスモンディの設例では、恣意的と はいえ、それは、総賃金の20%から40%の比重 である。そこには、生理的欲求を超える社会 的・文化的欲求の充足という,本来,労働力の 再生産の範囲に属する要素も含まれるであろう が、彼があえてこの概念を際立たせたのは、そ れ以上の積極的な含意があったと見てよい.

当然のことながら、労働者階級の窮乏という 歴史的事実のまえには、このシスモンディが最初の経済学書で打ち出した余剰賃金という範疇 は破砕されざるをえない。すなわち、彼は、「経済学」執筆時点では、労働者階級が superflu や、なかんずく奢侈とは無縁であるという、したがって、この余剰賃金なる考え方が幻影に過ぎなかったという「悲しむべき発見」をしたに違いない。

現に、「経済学」のなかには、余剰賃金という言葉はおろか、そうした概念を支える考え方の痕跡さえ見あたらない。逆に、彼は、資本主義の生成が、階級分化をひきおこし、労働者階級の資本のもとへの実質的従属が必至となることに気付くにいたる。そして、賃金についていう、

労働者が「生活資料と労働との交換に際して雇い主(master-workman)と契約を結ぶとき,彼が身をおく状態は,いつも不利であった。けだし,労働者の生活資料に対する必要と彼自身でそれを獲得する能力の欠如は,雇い主の労働に対する必要よりはるかに大きく,そのために,労働者は,かろうじて露命をつなぐだけの必需品に対しての要求をも,たいてい自制した」²⁹⁾、と。つまり,労働力商品の売買に際しては,生産手段から切り離されている労働者は,それを排他的に独占する資本家に較べて,決定的に不利な立場にあり,賃金は最低生存費以下に圧下されざるをえないという認識が,これである。

以後,シスモンディにあっては,賃金は分割 されることなく,しかも,内容的には,かつて の必要賃金に相当する規定のもとに把握される ことになる.

IV 国民所得範疇および「国民バランス」 論の推転

[A] 国民所得範疇の変化

すでに見たように、『商業的富』では、国民所 得は、年生産物からその生産に投下された必要 賃金を控除したもの(P-N)であり、余剰賃金 および[土地を含む固定資本の]ラーント,[流 動資本の]利潤30)から構成される(S+f+r +カ)、「経済学」では、余剰賃金という考えが 消える以上, なにはともあれ, 上記の国民所得 把握が維持できなくなるのは当然であるが、そ れと同時に, この論文には, 表現は必要賃金で あれ賃金であれ、ともかく国民所得から可変資 本部分を控除するというたぐいの記述も見られ なくなる。しかし、では、余剰賃金に代わって、 賃金一般が国民所得の構成部分になるのかとい うことになると歯切れが悪い。たとえば、彼は、 「国民の成員たる市民の間での、毎年再生産さ れた富の年分配は、国民所得を構成する、それ は、再生産がその分だけそれを生産した消費を 超える全価値からなる [31]、という。この文章 の前半をとれば、労働者も「毎年再生産された 富の年分配」にあずかるのだから賃金は国民所 得の構成部分ということになる。ところが、後

半をとれば、労働者の消費は、彼の見地では、 再生産を「生産した消費」にほかならないのだ から、必要賃金の場合同様、国民所得範疇から 排除されねばならない。

そもそも、シスモンディは、「経済学」におい て、資本と所得の区別の問題を提起しながら暗 礁に乗り上げている。彼によれば、悩みは、年 消費は年所得によって制限されざるをえないの に, 年生産物はあげて消費に予定されていると いう点であるのである。そして,彼は,「きわめ て重要かつ微妙なこの二重の関係を,一方では, ·所得がいかにして資本から発生するか,他方で は、ある人にとって所得であるものが、いかに して他の人にとって資本でありうるのか、を明 らかにすることによって」、解こうと試みると 予告する32)。だが、この試みにおいて、シスモ ンディは、読者を迷路に誘い、引きずり回した あげく, そこから脱出させることに失敗する. しかも,この失敗は『新原理』まで尾を引いて いること, 周知のところである。かつて, 『商業 的富』では、余剰賃金のみが資本と所得との二 重定在であり、必要賃金は純粋に資本であった。 「経済学」では、賃金一般が資本であり所得であ るという予感をいだきながらも、それを理論的 に説明することおよびそれを体系内で整合的に 位置づけることにしくじる。ただ、彼は、事実 上そのように扱う。まえのパラグラフにおける 国民所得の定義は、この間のことを象徴的に示 すものである.

この点は、こうである。すなわち、『商業的富』では、再生産過程は、すぐれて所得(S+f+r+p)の一部の追加資本(X)への転化の過程として把握されていた。そこでは、国民所得の配分にあずかる階級[産業資本家・土地所有者・生産的労働者]は、消費主体であるよりは、「生産的階級」として、機能的には蓄積あるいは労働の主体として登場する。シスモンディの表現「創造する労働、蓄積する節約、破壊する消費」(=「支出」による非再生産的消費)を節約し、蓄積をとおして「創造する労働」を増やすことに過程の規定的契機が求められていたのである。ところが、

過渡的性格がまつわりつくとはいえ, 本質的に は過剰生産に起因する過渡的恐慌の頻発は,シ スモンディに否応なく実現の問題を突きつけた。 「経済学」では、だから前述の「二重の関係」の 解明が重要となるのである。こんどは、彼が 「生産的階級」として括った3階級も、消費主体 の属性をももつものとして再把握され、そこで は、富を「破壊する消費」も富を実現する消費 という側面で規定しなおされる。そして、この 場合, 国民所得は, 蓄積の源泉である以上に, 消費の源泉という役割を与えられるのである。 とすれば、この場合、賃金を国民所得からはず すことは考えられない。それは、消費者として の賃労働者を否定することだからである。とは いえ, それにともなう体系の再編は不完全で. そのことが、「経済学」におけるこの論点での叙 述の透明度を低いものとしたといえる.

[B] 「国民所得と国民支出のバランス」から 「生産と消費とのバランス」へ

産業革命期をつうじて, 生産と消費とのバラ ンスは, たびたび大きく崩れ, 経済過程を激し く撹乱した。いわゆる過渡的恐慌の継起的勃発, これである。シスモンディは、かかる現実をま えに、消費を無視しての生産の急激な拡大から くる過剰生産の事例を,「経済学」のなかで描い ている。市場から切り離された孤立農家が、あ る年,播種面積と播種量を二倍にしたと仮定し、 これにともなって倍増した穀物、とりわけその 増加分を, 前年度なみの家族や雇用者では到底 消費しきれず、必然的に過剰が発生するという、 まことに稚拙な例証がそれである34)。『新原理』 にも、まったくこれと同じ例示を見出すことが できる35)。その稚拙さは別として、ともかく彼 は, 生産の無制限的拡大が消費を乗り越えるこ とがあるという事実を認めたのである。とすれ ば、シスモンディにとって、かつての蓄積を賛 美した立論は変更されねばならない.

すなわち、『商業的富』での蓄積論のシェーマに見られる「国民所得と国民支出のバランス」を重視した・生産=蓄積視角の「国民バランス」論は、『エディンバラ百科辞典』への寄稿論文では、生起する事実の重みに促迫されて、「生

産と消費とのバランス |36)を基軸とする・消 費=実現視角のそれに編成替えされる。たとえ ば、「あらゆる結果が今度は原因となる循環的 連鎖(circular concatenation)によって、生産 は所得をもたらし、所得は消費可能なファンド を提供しまた制約する、このファンドは再び生 産を引き起こし、それを(消費に)適合せしめる。 相互に均衡を保つこれら三つの量がゆっくりと 増加しつづけるかぎり、国富は増加しつづけ、 国家も繁栄しつづける」37)、と、また、別の箇所 では、「労働を増加させることは富を増加させ ることであり、また、富と一緒に、同じ割合で、 所得と消費を増加させることであるのは,一般 的に認められうるが、それにもかかわらず、あ まりにも急激すぎる労働の増加によって国民が 消費の適切な伸張度から離れたり、したがって、 浪費同様節約によってその国民自体を破滅させ たりすることがともにありえないとは、少しも 立証されていない |38)、と、社会的総再生産= 総流通過程の把握で、消費や所得が、生産の更 新あるいは資本の再生産を制約する重要な契機 として認識されるにいたるのである。蓄積のた めの蓄積. 生産のための生産という視座に立つ 『商業的富』とは、この点で、決定的な違いを見 せている。そして、シスモンディは、急激な蓄 積・急速な拡大再生産を排し、緩慢な蓄積・ゆ るやかな拡大再生産に富の増進の有り様を求め るのである。ただし、その場合、かかる生産・ 所得・消費などの諸契機は、おのずから均衡的 な発展軌道を描くものと考えられており、人為 的統制も必要ないとする見解が示されている。 そして、よしんば一時的に均衡軌道からの乖離 ――「生産と消費とのバランス」の崩れ――が 生じても外国貿易によって修復できるとされて いた

以上の「循環的連鎖」は、まぎれもなく、『新原理』の第 II 編第 6 章 「消費による生産の、所得による支出の逆規定」(Détermination réciproque de la production par la consommation, et de la dépense par le revenu) においてシスモンディ理論の要諦にすえられた国富の発展過程での「循環的運動」(mouvement cir-

culaire)把握——①国民所得による国民支出の制約,②国民支出による消費ファンドのうちへの総生産物の吸収,③絶対的消費による再生産規模の規定,④再生産による国民所得の創出——の原型である。そして,『新原理』においても,均衡軌道の自律的維持や外国貿易による均衡の復元という上の見解がそのまま再版されている。

両者の差は次の3点である。すなわち, i)循 環の始点と終点が「連鎖」では生産であるのに 対し、「運動」では所得である。上記第6章の標 題にも端的に示されているように,「運動」の循 環把握の方が、消費なり所得なりの規定性が一 歩進んだ形式で示されている。ii)「連鎖」で は、「運動」にある支出という契機が欠落してい る。それは、「経済学」では、なお『商業的富』 同様, 支出から労働者による賃金の支出が排除 されているからである。いわく、「支出という 名称は、本来、なにも生産しないくだんの消費 にのみ与えられる;そして, 生産的労働者の賃 金に相当する消費は、ファンドの使用であって 支出ではない」39)、と、この点で、国民支出によ る消費ファンドのうちへの総生産物の吸収なる 把握を示す『新原理』と隔たりがある。「経済 学」では、相変わらず、彼は、賃金=労働力へ の資本の投下と所得としての賃金の支出との関 係を十分整理できていないのである。この規定 に立つかぎり, 所得=支出=消費=生産という バランスは成り立たない。 つまり、「生産と消 費とのバランス」に所得は組み込めても、支出 は組み込めないのである。ひるがえって、「経 済学」での賃金と所得節疇との関係をめぐる叙 述の不分明さも、ここに一因があると思われる。 iii)「連鎖」の議論には、「運動」を論ずる際にシ スモンディが主張した, あの「今年の生産を支 払うべきものは去年の所得である」、ないしは 「結局、その年の生産の総体を前年の生産の総 体と交換するにすぎない」という独特なラグ理 論は見られない40).

しかし、そうじて、「経済学」のバランス把握 あるいは循環把握は、辞典項目であるため紙幅 の制約があり、また、初動にありがちな「旧原 理」からの訣別の不徹底さや「新原理」の熟成 の不十分さが残ってはいるものの、本質的には、 『新原理』の側に立つものであった。

V むすびにかえて ----「経済学」における相対的過剰人口論 の成立-----

最後に、残された論点、シスモンディの人口 論を、蓄積論にかかわる限りで取り上げ、本稿 のむすびとしよう。

シスモンディは,「経済学」で,前の章で言及 した孤立農家の生産過剰の例に注をして, かか る生産物の過剰を家族の繁殖によって解決しよ うとする逃げ道にはくみしないと述べ, その理 由として、「人間の産出は食料ほどには速くな い」ことをあげている。そして、こうした自分 の見地がマルサスの絶対的過剰人口論と相容れ ない旨を付言, あわせて, 後段において自己の 人口論を展開するむね予告するのである41)。か くして,「経済学」にいたって,体系の最終章と して、新たに人口論が登場する。この新たに登 場した人口論は、そのまま『新原理』の最終編 に引き継がれるのであるが、それが、シスモン ディにおける蓄積論の旋回にとってのみならず, 新たな原理への跳躍全般にとっても, いかに重 要であったかは、主著『新原理』の場合、サブ タイトルが「人口との関係での富について」と なることを見てもわかる。

『商業的富』にも、人口にかんしての論述がまったく見あたらないわけではない。この著作では、あくなき蓄積が、国民の繁栄と富裕とをもたらすはずのものとして、なんの陰影もなく賛美されている。そこでは、蓄積の進行は、なによりも必要賃金の累増であり、それに見合った生産的労働者の雇用量の増加である。この脈絡のなかで、人口問題は、もっぱら生産的労働者に対しての累増する需要をみたす人口はどこから来るか、という角度でのみ俎上にのぼる。シスモンディは、この追加労働力の供給源について、三つの源泉を列挙する。すなわち、①生産的労働者たち自身の間での出生による自然的増、②外国からの募集、そして、③不生産的労働者

たちの間からの採用の三つ,これである⁴²⁾。 「旧原理」のもとでの蓄積論からすると,人口の 取扱は、この視角で足りた。

ところが、「経済学」の段階になると、これと は反対に、過剰人口の問題が浮上し、しかも、 この問題は、シスモンディにとって、一つの章 を割かねばならぬほどの深刻さで意識されるよ うになる。まず、彼は、マルサスの過剰人口論 を批判していう「一国の資本が支払いうる労働 需要こそ人口を制約するのであって, その国が 生産しうる食料の量ではない」43), と. そして, 資本蓄積→新労働力需要の喚起→労賃上昇→人 口増加という経路を明らかにする。だが、なん らかの原因で、一転、かかる労働力需要の衰退 がおこると、今度は過剰人口が発生する。シス モンディは、「過剰人口を国家にもたらすのは、 労働需要におけるこれらの変動、貧しい職人達 の生活に頻発するこの種の革命である」44)と述 べ、そうした過剰人口の悲惨な運命を、すなわ ち、「労働の停止が、もっとも残酷な戦争よりは るかに残酷な惨禍をひきおこす」その実態を, 情りをこめて描く⁴⁵⁾。

とすれば、産業革命の爛熟期に古典学派が直 面した機械の導入と労働力需要との相関は,シ スモンディにとっても避けて通れぬ論点であっ た. シスモンディは, これについて, 次のよう に論じている46): — 「技術の進歩, 工業の進 歩、したがって富と繁栄の増進は、より少ない 労働者を雇用することによって, すべての労働 の果実を生産するという経済的方法を発見す る」、もし、この場合、その結果遊離される労働 者群を吸引しうるだけの生産拡大を許容する市 場の拡張[=消費者数の増大]が見られるならば、 生産力展開も人類社会にとって利益となる。 し かし、現実には、かかる市場の拡張=消費者数 の増大は容易ではない。たしかに生産力の発展 は, 生産物価格の低下を槓杆とする実質賃金の 上昇や新市場の開拓等々をつうじて, ある程度, 国内市場や世界市場を拡大する作用をもつが, それは、上述の生産拡大を許す水準にはほど遠 い、とすれば、機械によって浮く過剰な労働者 の大群は、結局、生産から遊離されたままとな

る。また、機械の導入に誘発されて成立する新 規の機械製造部門などが、新たに労働力を吸引 はするが、それとて、在来部門からの労働力の 排出を相殺するには、これまたほど遠い. いわ く,「もし,製造業者達が,5%の節約で,労働 者達の代わりに蒸気機関を使用できたとすれば, イングランドの労働者達はみな街路に追放され るであろう。 /かつまた、機械類の改良と人間 労働の節約は, ただちに一国の消費者の数を減 少させる原因となる。けだし、没落した労働者 達はみな消費者であったのだから」と、さらに、 農村における大農場制度の導入や都市における 「機械的技術の発展」が、少数の富裕な資本家の 手への資本・生産の集中と、それにもとづく高 い生産力の達成をもたらし、かつ、その対極に、 多数の小生産者の没落と、彼らの賃労働者化を 必至とする。この場合も、消費の減退という結 末を見る。 ―― と、こうである。

つまり、機械の導入は、消費=市場を超える 生産過剰をもたらし、また、この消費=市場の 狭隘さが、機械の導入によって余分となった労 働者を吸収するだけの生産拡大を阻む、その結 果,大量の労働者群が生産から放逐され、相対 的過剰人口を形成する。彼らは貧窮に喘ぎ、そ れはまた、消費の衰退=市場の収縮を不可避と する, という構図, これである。 シスモンディ にあっては,この構図を扼するキーワードは, 消費ないし市場である。いうまでもなく、その 後景には、「循環的連鎖」に見られる諸契機間の 相互規定関係が、見透される。それはともかく、 かかるシスモンディの人口論=機械論のうちに は,産業革命の進展にともなう機械制大工業 (大農場経営)の発展が、過剰生産と過剰人口と の, したがってまた, 富と貧困との同時存在を 必然化する、という認識が読みとれる。シスモ ンディは,「経済学」最後のパラグラフに,相対 的過剰人口の大量創出によって,「惨苦はその 絶頂に達した。そして、ひとは文明の進歩を後 悔しはじめるであろう」という結語を書き込ん でいる47)

いうまでもなく、こうした「経済学」最終章に見られる人口論ないし機械論⁴⁸⁾は、『商業的

富』や正統古典学派の蓄積論と決定的に対立するものである。シスモンディ蓄積論は、この「経済学」の時点で、上来見てきた「旧原理」から「新原理」への諸転変とあわせて、過剰人口論を新たに付け加えることにより、『新原理』まであと一歩という地点に到達したといえる。

(福島大学経済学部)

注

- 1) シスモンディは、過剰生産恐慌を,「全般的供給過剰」(encombrement universel)ないし「全般的市場梗塞」(engorgement universel)とよぶ、産業革命期に照応する過渡的恐慌としては, 1793年, 97年, 1810年, 15年, 19年恐慌が知られている。
- 2) Cf. Sismondi, J.-C.-l. Simonde de, Nouveaux principes d'économie politique, Avertissement de la première édition, Daulnay, Paris, 1819, pp. xix et suiv., Avertissement de la seconde édition, 2° éd. 1827, pp. i et suiv.(以下の引用は煩雑さを避けて第2版からのみおこなう). 菅間正朔訳, 世界古典文庫版(上), p. 27以降および p. 357以降, 参照. 拙稿「蓄積論における古典と近代(一) シスモンディ蓄積論によせて 」『商学論集』(福島大)第33巻第4号, 1965年, pp. 123-43, 参照.
- 3) Sismondi, J.-C.-l. Simonde de, *De la richesse commerciale*, Paschaud, Genève, t. 1, 1803, pp. 14 et 16.
- 4) Marx, K., *Das Kapital*, Bd. I, M.-E. Werke, Dietz, Berlin, 1962, Bd. 23, S. 580. 大月版『全集』23巻, p. 722.
- 5) Sismondi, J.-C.-l. Simonde de, *Political Economy, Brewster's Edinburgh Encylopedia* [1815], 1818, reprinted, Kelly, New York, 1966, p. 13.
- 6) たとえば、中村賢一郎「シスモンディと転向問題」『政経論叢』(明治大)、1963年、当論稿には、この conversion problem をめぐる内外の諸説の周到な紹介が見られる。
- 7) 大島雄一氏は、例外的に、この『商業的富』を対象とするすぐれた分析「シスモンディ経済学研究序説――『商業的富』について」『経済科学』(名古屋大)第6巻第3号、1959年を遺しておられる。そこでは、スミス学説の忠実な祖述とシスモンディが自負する本書が、その実、『国富論』のシスモンディが再編・翻案であったことが説かれている。むしろ、一般的評価とは異なるこうした評価が、研究史上例外的なこの『商業的富』の研究を生んだといってよいであろう。なお、先の中村論文は、この大島説への批判を含む。
- 8) Aftalion, A., L'œuvre économique de Simonde de Sismondi, Paris, 1899, reprinted, Burt Franklin, New York, 1970, p. 25.
- 9) 吉田静一『フランス古典経済学研究』有斐閣, 1982 年, pp. 231-32.

- 10) Sismondi, De la richesse commerciale, t. 1, pp. 14 et 16.
 - 11) Ibid., pp. 342-43.
- 12) 吉田静一『異端の経済学者シスモンディ』新評 論, 1974年, p. 161.
 - 13) Ibid., pp. xx xi et 62.
 - 14) Ibid., pp. 276 et suiv.
 - 15) Ibid., pp. 85-86, 90, 108-109, 345 etc.
- 16) *Ibid.*, pp. 87, 90-91, 97-98, 345-46 etc. ただし, この場合, シスモンディによる三つの生産的階級の厳密な規定・分属は, 生産的労働者, 動産的富の所有者(貸付資本家・機能資本家), および固定資本と土地の所有者の3者であり,これらが所得範疇——余剰賃金, 利潤, ラーントにそれぞれ対応する(pp. 90-91).
- 17) *Ibid.*, Note(7) dans le chapitre IV du livre premier, pp. 104 et suiv.
 - 18) Ibid., p. 106.
 - 19) Ibid., p. 104.
 - 20) Ibid., p. 82.
- 21) Cf. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, M.-E. Werke, Bd. 23, S. 621. 大月版『全集』 23 巻, pp. 775-76, 参照,
- 22) Sismondi, *De la richesse commerciale*, t. 1, Note(1) dans le chapitre I du livre second, pp. 288-95
- 23) Smith, A., An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of A. Smith, 1976, Vol. 1, p. 68. 大内兵衛・松川七郎共訳『諸国民の富』岩波書店, 1969, 第 I 巻, p. 136.
 - 24) Sismondi, Political Economy, pp. 24 & 26
- 25) Sismondi, *De la richesse commerciale*, t. 1, p. 295.
 - 26) Ibid., p. 345.
- 27) Smith, *op. cit.*, pp. 85-86. 前掲訳書, pp. 163-64.
- 28) Sismondi, De la richesse commerciale, t. 1, pp. 108-109.
 - 29) Sismondi, Political Economy, p. 22.
- 30) ちなみに,先の絹産業の例でも,利潤率は,対 流動資本[原料+必要賃金+剰余賃金]で表されている。
 - 31) Sismondi, op. cit., p. 25.
 - 32) Ibid., pp. 20-21.
 - 33) Ibid., pp. 16-17.
 - 34) Ibid., p. 23.

- 35) Sismondi, Nouveaux principes d'économie politique, 2° éd. t. 1, pp. 95-97. 前掲訳書(上), pp. 109-10. よく知られているように, この『新原理』での同一事例は, かたや, レーニンによって「極端にまずい例」(レーニン「経済学的ロマン主義の特徴づけによせて」大月版『全集』第2巻, p. 125.)として一笑に付され, かたや, ローザによって,「この例の子供らしさにもかかわらず, 結局においては, 資本化される剰余価値に対する販路はどこにあるか? という決定的な問題が前景にでてくる」(Luxembrug, R. Die Akkumulation des Kapitals, Eine Beitrag zur ökonomischen Erklälung des Imperialismus, R. Luxembrug Gesammerte Werke, Dietz, Berlin, 1975, Bd. 5, p. 151. 長谷部文雄訳『資本蓄積論』青木文庫, 1953年, 中, p. 197.)と評価された, あの箇所である.
 - 36) Sismondi, Political Economy, p. 28.
 - 37) Ibid., p. 26.
 - 38) Ibid., p. 28.
 - 39) Ibid., p. 27.
- 40) Sismondi, Nouveau principes d'économie politique, t. 1, pp. 113-27., 前掲訳書,(上)pp. 108-30. なお, 拙稿「古典派蓄積=恐慌論争の一断面――シスモンディによる〈消費と生産との均衡〉=矛盾把握――」『商学論集』(福島大)第44巻第2号, 1975年, pp. 172-78, 参照. Do., Political Economy, p. 28.
 - 41) Sismondi, Political Economy, p. 23.
- 42) Sismondi, De la richesse commerciale, t. 1, p. 110.
 - 43) Sismondi, Political Economy, p. 119.
 - 44) Ibid., p. 120.
 - 45) *Ibid.*, pp. 126-28.
 - 46) Ibid., pp. 128-32.
 - 47) Ibid., pp. 131-32.
- 48) Ibid., p. 28. ちなみに、こうした「経済学」における過剰人口論あるいは機械論は、思想的には、シスモンディ自身述べているように、オーウェンの影響を強く受けている。また、その執筆・刊行の時点は、リカードウがなお旧機械論にとどまっていた時期であり、リカードウの新機械論に影響を及ぼしたバートン(John Barton, 1789-1852)の『社会の労働者階級の状態に影響する諸事情にかんする考察』(Observation on the Circumstances which influence the Conditon of the Labouring Classes of Society, 1817) と相前後する時期にあたる。